

随筆

インド駐在記

加 古 資 弥

1. はじめに

筆者は2022年11月から2025年12月までの約3年間、インド・タミルナドゥ州チェンナイに所在するKYB Motorcycle Suspension India Pvt. Ltd.（以下KMSI）へ駐在した。本稿では、駐在期間における業務および現地生活について振り返り、その経験から得られた知見について述べる。

チェンナイは南インドを代表する工業都市であり、自動車関連産業を中心に発展を続けている。赴任当初はコロナ禍からの回復期にありながらも街には活気があり、インド経済の成長を肌で感じる環境であった。

2. インドについて

インドは南アジアに位置する共和制国家であり、人口は14億人を超え、中国と並ぶ世界最大級の人口を抱える国である。国土面積も広大で、日本の約9倍に相当し、北部にはヒマラヤ山脈、南部にはインド洋が広がるなど、地理的にも多様な特徴を持っている。

インドは多民族・多言語国家であり、憲法で公認されている言語だけでも20以上存在する。ヒンディー語と英語が連邦政府の公用語として広く使用されているが、各州では地域固有の言語が日常的に使われている。宗教についてもヒンドゥー教を中心に、イスラム教、キリスト教、シク教、仏教などが共存しており、宗教や文化が人々の生活に深く根付いている。

経済面では、近年インドは高い成長率を維持しており、新興国の中でも存在感を増しているIT、製薬、製造、スタートアップの各業界が成長を牽引しており、特にIT業界では世界的な競争力を持つ企業も多い。一方で、地域や階層による経済格差も大きく、先進的な都市部と農村部では生活水準に大きな違いが見られる。

政治体制は連邦制を採用しており、各州が一定の自治権を持つ。そのため、法律や制度、商習慣、行政手続きなどが州ごとに異なる場合も多く、インド

を一つの国として一括りに理解することは難しい。この多様性こそがインドの特徴であり、同時に複雑さの要因ともなっている。

生活面では、家族や地域社会を重視する価値観が強く、人と人とのつながりが日常生活の基盤となっている。都市部では近代的な生活様式が広がる一方、伝統的な慣習や価値観も色濃く残っており、新旧が混在する独特の社会が形成されている。

このようにインドは、急速な経済成長と長い歴史に裏打ちされた文化的多様性を併せ持つ国である。単純なイメージでは捉えきれない複雑さとエネルギーを持ち、長期的な関わりを通じて理解が深まる国と言える。

インドを代表する観光地であるタージマハルとインドで購入したガネーシャ像を、写真1・写真2に示す。



写真1 タージマハル



写真2 現地で購入したガネーシャ像

3. チェンナイの紹介

チェンナイは、インド南部タミルナドゥ州の州都であり、同州最大の都市である。ベンガル湾に面した港湾都市で、インド全体でもムンバイ、デリー、コルカタなどと並ぶ主要都市の一つとして位置付けられている。都市圏の人口は1,000万人を超え、南インドにおける経済・産業・文化の中心地として重要な役割を担っている。

経済面では、チェンナイは自動車産業を中心とした製造業の集積地として知られ、「インドのデトロイト」と呼ばれることもある。完成車メーカーや多数の部品メーカーが進出しており、周辺には工業団地や物流拠点が広がっている。近年は製造業に加え、ITサービス、ソフトウェア開発、スタートアップ分野も成長しており、伝統的な工業都市から多様な産業を抱える都市へと変化を続けている。

気候は年間を通じて高温多湿で、特に4月から6月にかけては厳しい暑さが続く。一方で、季節による気温差は比較的小さく、10月から12月にかけてはモンスーンの影響による降雨が見られる。日本と大きく異なる気候環境は赴任者にとって負担となることもあるが、生活リズムを工夫することで次第に順応できるようになる。

文化的には、チェンナイはタミル文化の中心地であり、独自の言語であるタミル語が広く使用されている。タミル映画や伝統音楽、舞踊、文学などが人々の生活に深く根付いており、市内には歴史あるヒンドゥー寺院が数多く存在する。宗教行事や祝祭が日常生活の一部として受け入れられている点は、チェンナイの大きな特徴の一つである。

食文化も南インド特有の特色を持つ。米を主食とし、イドゥリやドーサ、ヴァダといった料理が日常的に食されている。比較的油分が少なく、発酵食品や豆類を多く用いる点が特徴で、日本人にも馴染みやすい料理も見られる。一方でスパイスの使い方は巧みで、地域ごとの味の違いを楽しむことができる。

都市としてのチェンナイは、急速な経済発展と深い伝統文化が共存している点に特徴がある。人々は家族や地域を大切にし、互いに助け合いながら生活している。こうした人間関係の近さは、長期滞在を通じて次第に理解が深まり、チェンナイの魅力として感じたことの1つである。

このようにチェンナイは、インド経済の成長を背景に発展を続ける一方で、歴史と文化を大切に守り続けている都市である。ビジネス都市としての側面と生活文化の奥深さを併せ持つ点が、チェンナイの最大の魅力と言える。

チェンナイの光景を写真3～9に示す。



写真3 インド最南端に位置する港町カニャクマリ



写真4 チェンナイ中心部にあるシーフード店



写真5 駐在期間中、手で食事をするのも随分上達した

4. 業務と組織の変化

駐在期間中、KMSIは大きな変化を遂げた。従業員数は赴任当初の約2倍となり、業績もインド市場の拡大とともに大きく成長した。

一方で、急速な組織拡大に伴い、人財育成や業務標準化といった課題も顕在化した。特に、業務プロセスや品質意識においては、日本との考え方の違いが見られ、意思疎通に苦勞する場面もあった。しか

し、現地スタッフは変化への適応力が高く、新しい取り組みに対して前向きに挑戦する姿勢を持っており、これらの課題は徐々に改善されていった。

こうした経験を通じて、単に日本のやり方を適用するのではなく、現地の特性を理解した上で最適な方法を模索する重要性を強く認識した。

5. 異文化理解と自己理解

インドで仕事を進める中で、最も難しかったのは異文化そのものではなく、自身が無意識に持っていた価値観や先入観であったと感じている。文化や慣習の違いは事前に学ぶことができるが、自分自身の思考の癖や固定概念に気づくことは容易ではない。その意味で、異文化理解以上に自己理解の重要性を強く認識した。

インドでは家族を非常に大切にする価値観が社会全体に根付いている。業務上の意思決定や行動の背景には、本人だけでなく家族の存在が影響している場合も多々あった。この点が理解できてからは、業務面に限らず、可能な範囲でプライベートな事情も含めて同僚の心情に寄り添うことを心掛けるようになった。「自分の家族だったら、どのように感じるだろうか」という視点を常に意識しながら行動していたように思う。



写真6 チェンナイ郊外での日常の風景（山羊）



写真7 チェンナイ郊外での日常の風景（牛）



写真8 インドのカラフルなお寺

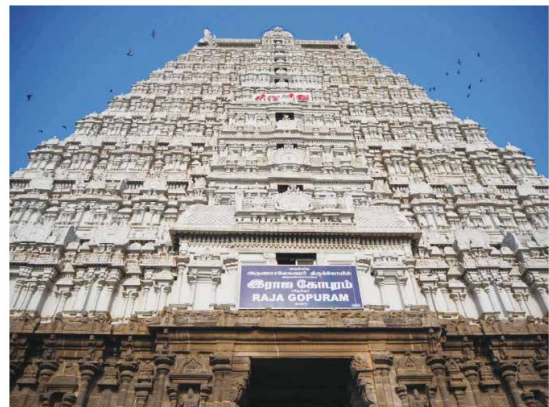


写真9 南インドのヒンドゥー寺院に見られる塔門

また、コミュニケーションにおいては、お互いの貢献を認め合う姿勢が重要であると感じた。一方的に指示を出すのではなく、なぜこの業務を行うのか、丁寧に相手に寄り添った説明をすることを意識した。

加えて、仕事において求める成果のレベル、すなわち期待値を事前に具体的に示すことも心掛けた。結果の基準が曖昧なままでは、評価の齟齬や無用な摩擦を生む。期待する水準を明確に共有することで、双方にとって建設的な関係を築くことができたと感じている。

6. 言語とコミュニケーションについて

インド駐在を通じて感じたことの一つは、必ずしも語学力がコミュニケーションの成否を決めるわけではないという点である。英語や現地語が完璧でなくても、自分の言葉で相手の目を見ながら、誠意を持って一生懸命に話せば、相手はきちんと話を聞いてくれる。語学はあくまで意思を伝えるためのツールであり、大切なのは流暢さそのものではなく、相手に伝えようとする姿勢であることを実感した。重

要なのは、何を伝えたいのか、どのような姿勢で相手と向き合っているのかである。言葉が拙くても、真摯な態度や本気度は相手に伝わる。

実際に、業務上の重要な場面においても、完璧な表現を求めるより、自身の考えや想いを率直に伝えることを重視してきた。その結果、相手との信頼関係が深まり、建設的な議論につながる場面が多かった。この経験から、異文化環境において求められるのは語学力だけではなく、人として相手に向き合う姿勢であると強く感じている。

7. 生活と現地コミュニティ

業務外では、現地コミュニティへの参加を通じて充実した生活を送ることができた。チェンナイマラソンクラブ（以下CMC）ではランニング活動を通じた交流を深め、フットサルサークルJFCC（以下JFCC）では日本人だけではなく、韓国人やイタリア人とも一緒にプレーする機会があった。JFCCではインド国内の都市対抗遠征にも参加し、各都市の文化や雰囲気に触れる貴重な機会となった。スポーツを通じた交流は言語の壁を越え、人との距離を縮める有効な手段であると実感した。

クラブ・サークルでの活動を写真10～14にて示す。



写真10 フットサルの練習風景



写真11 バンガロールで行われた都市別対抗戦



写真12 開始時間が早いインドのマラソン大会



写真13 完走賞のメダル



写真14 CMC恒例の卒印ドボン

8. インド各地での経験

駐在期間中には、タミルナドゥ州内に加え、コルカタ、デリー、アグラ、バラナシ、ムンバイ、コチ、ブダガヤ、ハイデラバード、ジョードプル、ジャイプールなど各地を訪問した。ローカル電車での移動では、日本とは異なる混雑環境や運行事情に直面したが、その中で柔軟に行動する現地の人々の姿は印象的であった。また、見知らぬ乗客同士が自然に助け合う様子が見られ、人との距離の近さを感じる場面も多かった。さらに、ガンジス川を訪れた際

には、宗教と生活が密接に結びつくインド社会の価値観を体感し、自身の考え方を見つめ直す契機となった。

インドで訪れた町の風景を写真15～18に示す。



写真15 ローカル鉄道での旅行



写真16 ガンジス川では部分浴を経験した



写真17 青い街ジョードプル



写真18 光の祭典ディワリにて賑わうジャイプール

9. 印象的な出来事

駐在生活の最後に、同僚が企画してくれた卒印旅行では、同じデザインのシャツを作成して着用し、バスを一台貸し切って長距離移動を行った(写真19)。車内では音楽やダンス、寸劇などが繰り広げられ、非常に楽しい時間であった。盛り上がるにつれて、英語ではなく現地語であるタミル語でのコミュニケーションとなっていた。自身は流暢に現地語を話せるわけではないが、日常生活を通じて基本的な会話のニュアンスは理解できるようになっていたため、車内の一体感を十分に感じることができた。

この旅行は、単なる送別行事にとどまらず、現地スタッフとの信頼関係を実感する象徴的な出来事であった。



写真19 卒印旅行を企画してくれたスタッフたち

10. 感謝

本駐在期間を共に支えてくれた駐在員に、心から感謝を伝えたい。異国の地で直面する課題や迷いを共有しながら、前向きに取り組むことができたのは、共に働いた駐在員の存在があったからにほかならない。

多忙な日々の合間を縫って、食事を共にしながらKMSIの将来や事業の方向性について語り合えた時間は、今振り返っても非常に印象深いものである。目の前の課題に追われる中でも、中長期的な視点で

熱い議論を重ねることができたことは、貴重な経験であった。

そして、そうした対話の中で描いた構想やアイデアを、一つずつ現実の形にしていくことができたことは、大きな喜びである。必ずしも全てが順調に進んだわけではないが、試行錯誤を重ねながら共に前進できたこと自体が、本駐在の意義であったと感じている。

本駐在を通じて得た経験と、人とのつながりは、自身にとってかけがえのない財産である。この場を借りて、共に汗を流し、同じ方向を向いて歩んだ全ての方々に、改めて感謝を申し上げたい。

11. おわりに

約3年間のインド駐在を通じて、急成長市場における業務経験と異文化環境での生活経験の双方を得ることができた。

特に、文化や価値観の違いを理解しながら協働していく難しさと重要性を実感したことは、大きな学びである。本経験で得た知見を今後の業務に活かし、引き続きグローバルな視点での価値創出に貢献していきたい。

著 者



加古 資弥

2015年入社。経理本部財務部。経理本部経理部。KMSI駐在を経て現職。